

Jane Austen 文学における「則天去私」の視点

— *Pride and Prejudice* について —

鎌 田 京 子

〔抄 録〕

ジェイン・オースティン (1775 - 1817) は、十九世紀イギリス文学における家庭小説の中でオースティンの右に出る作家はいないとされ、地方の上流中産階級の平凡な家庭生活を題材にとり、リアルで精細、鮮明で無駄のない文章を描写した。その根底には道徳的感覚、心理描写が横たわっているリアリズム文学である。漱石は『文学論』のなかで「Jane Austen は写実の泰斗なり」と絶賛した。「則天去私」は漱石を表象する言葉である。漱石は晩年「則天去私」の作品の例としてオースティンの『高慢と偏見』をあげた。

本稿は、若い男女が恋愛を通して成長し、高慢と偏見を正していくという単純なモチーフをもつ『高慢と偏見』が、何故「則天去私」になるのか、オースティンの小説技法から一つの見方として検討するものである。

キーワード：オースティン、高慢と偏見、則天去私、漱石、文学論

I. 序 論

漱石は晩年、『明暗』を現存分のほとんどを書き終えていた時期に「則天去私」について弟子達に語り、しかも「自分はちかいうちにかういう態度で、新しい本当の『文学論』を大学あたりで講じてみたいと述べ、「則天去私」の小説の一つとしてジェイン・オースティンの作品を挙げた」¹⁾。この新しい本当の『文学論』は、漱石が作家として文学とは何かを勝ち得た証であったと云えるであろう。明治40年に刊行された『文学論』四篇 第七章、写実法において、漱石はジェイン・オースティンの『高慢と偏見』および『分別と多感』を論じているが、そこに述べられているオースティンへの称賛の言葉は注目に値する²⁾。オースティンと漱石の間には、日刊の文芸新聞『スペクテイター (*Spectator*)』について、その虚像と小説の批判が両者において基本的に類似しているのが見えることから、漱石がオースティンを媒介として『スペクテイター』

を異なる視点から見直し、新しい創造世界を切り開いていったと考えられる³⁾。このように漱石とオースティンの関係は『文学論』および『文学評論』⁴⁾に見えるように、深い関係にあると言わざるをえない。

「則天去私」は、日本近代文学の諸事象の中で多く取り上げられ、様々に解釈され問題にされているが、未だに画然とした解明はない。漱石は「則天去私」の四文字の揮毫は残したものの説明を書き残していない。

本稿は、漱石が称賛を惜しまなかったオースティンの文学が、何故「則天去私」になるのかを、『高慢と偏見』について、オースティンの小説技法の点から、一つの見方として検討するものである。オースティンの作品と「則天去私」の関係は、指摘されながらもその考察はこれまで具体的にない。

Ⅱ. 「則天去私」について

「則天去私」は漱石を象徴する表現である。この四文字を聞き取った多くの門下の人々には記憶されているが、いずれも断片的であり、これまで思想的境地であるのか、あるいは創作上の方法としての問題であるのか、様々に評価されてきた。「則天去私」の解釈と思われる漱石の言葉について門下生、森田草平著「先生と門下」⁵⁾に注目してみたい。

「先生は亡くなる二、三カ月前から、この「私」ということを問題にしてゐられた。」「先生に従えば、私ども若い者の書く物には凡て「私」がある。自分の「私」を以って他の「私」を説服しようとするから相手の悦服しよう筈がない。」「また「私」を捨て、神と同じ心持になってこそ、始めて相手の誤りを承認させることも出来るのである。そして「私」を捨てることの難しさを指摘し、「私」が出ていない例としてシェイクスピアをあげ、作中の人物が皆人物自らの意志によって動いてゐる。すなわち、シェイクスピアは自分の職業と思って脚本を書き、「自分が偉いと思って作をするよりも「私」が無いだけ尊いものになっている」というものである。とくに『明暗』においては、「先生自らちっとも「私」を出さない。作中の人物は人物自らの意志によって、神の摂理に従って動いているもののように書き表したいと、折にふれて云っていられた。」と、漱石の言葉について回想を著し、漱石が「則天去私」を観念的思策ではなく創作の方法として見ていることがわかる。

さらに創作上の問題として取り上げているのは、江藤淳が「則天去私」について、これまでの神話的解释を退け、創作上の方法として考察している⁶⁾。佐々木充氏は『漱石推考』⁷⁾の中で、漱石は「則天去私」ということを、ただ観念的に思念していたのではなく、一つの態度として意識しており、到り着いた境地、悟達の境地などといっているのではない。漱石が模索していたのは「態度」であり、「方法」であったと論じている。また、『文学論』の注解⁸⁾についてみると「則天去私」(文章はあくまで自然なれ、天真流露なれ)の姿勢の作品として『高慢と偏見』

をあげたと言われるとして、これも作家の創作態度として受けとめている。

「則天去私」と英文学の関係については、漱石の論述は残されていないが、「則天去私」の例としてゴールド・スミスの『ウェイクフィールドの牧師 (*The Vicar of Wakefield*, 1766)』とジェイン・オースティンの『高慢と偏見 (*Pride and Prejudice*, 1813)』をあげ、「則天去私」と最も関係の深いのは『高慢と偏見』であると述べている⁹⁾。

漱石が活躍していた時代は、文学史的に見ると自然主義文学の時代であって、日本の自然主義運動 (1901 - 1906) は、人間の科学的観察を手段とするヨーロッパの自然主義とは異なり、作者の個の確立を試みる私小説へ展開し変化していったところであった。漱石は「私」を中心とする、このような自然主義文芸思潮の中であって、高踏派といわれ、自分の文学思潮を貫き倫理的に理知的小説を描き、晩年の『明暗』に至っている。漱石は『我輩は猫である』により作家として出発し、新聞小説の処女作『虞美人草』の作品によってプロの作家へ転身する。漱石の前期の作品は、浪漫主義思想の影響を受けた作風であったが、後期では創作の方法がリアリズム文学 (真実の追究) へと移行していった。

イギリス小説では、作者が物語に介入する語りの方法が伝統的な叙述形式であったが、十九世紀初めには、作者が作品から姿を消すという方法が取られるようになった。このことは、フィールドング (Henry Fielding) とスモレット (Tobias Smollett) によって早くから指摘されていた¹⁰⁾。『虞美人草』は、メレディス (George Meredith) の影響が認められる作品であるが、作者と作品の関係において、メレディス自身は頻繁に作品に口を挟み、物語に介入する傾向があると見られる作家¹¹⁾ であって、十八、十九世紀英文学一般の低徊調の最も典型的なものであった。このためメレディスの影響を受けた漱石は、『三四郎』の頃までは「私」が作品のなかに含まれていたと考えられる。『明暗』の頃には作者が介入して作品の中で訓戒を与えたり、しかりつけたりしていない。すなわち「私」が出ない、作中の人物が自らの意思によって動くことを、小説の新しい観点の方法として見出しつゝあったと思われる。

イギリスの小説批評に少なからぬ影響を与えたフランスの作家フロバール (Gustave Flaubert) は、作者は神が宇宙に存在するように、作品の中で見えない存在でなければならない、すなわち作者が作品から完全に姿を消すべきであるという見解を示していた¹²⁾。漱石はいつも外国作品を自分の道場としていた作家であって、晩年に至って創作の上で求めたものは「私」が出ていない小説、すなわち作者は作品から完全に姿を消し、神のように作品の中の何処にでも存在しているとするフロバール的な作品と作者の関係であって、ここに「則天去私」の四文字が表象されるに至ったのであろう。そのことは、オースティンのリアリズム文学を参考にするのであったと考えられる。そこで「則天去私」は思想的な境地よりも、芸術上の創作における小説技巧と考え、この見地からオースティンの『高慢と偏見』について考察することにする。

Ⅲ. 『高慢と偏見』と「則天去私」

『高慢と偏見』¹³⁾ はオースティンの中期の作品であり、1797年にできあがった『第一印象 (First Impression)』という書簡体小説を、数度にわたり手を加え表題を変えて1813年に出版された作品である。このため彼女は意識的な技巧家と見なされていた。とりわけ『高慢と偏見』は、この写実主義作家の代表作にとどまらず、イギリス小説史上の傑作として評価が高い。

相当の財産を持っている独身の男なら、妻を求めているに違いないと言うことは、広く世間に認められた真理である、という一文で始まる『高慢と偏見』の冒頭部分は、我々を小説世界へ導入し、そこに展開する人間生活の劇的な場面に没入させる。そして現実の世界でなく一つのフィクションであることを気づかせてくれる。

Julia Prewitt Brownは、この作品の冒頭部分の主張を、純粋な皮肉か、喜劇的コミックの誇張であり、叙述 (Narrative) と会話 (Dialogue) に類別し、叙述では目的と情報を明瞭に示し、会話では様々な異なる響きを持つという二つの流れがあり、この作品は叙述文に対し会話文が極めて多いことを指摘している¹⁴⁾。

オースティンは、「田舎の村の三、四軒の家庭があれば格好の題材となる」と云っていたように¹⁵⁾、カントリー・ジェントリーの狭い世界で小説を描いている。ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の「ジェイン・オースティン論」によれば「彼女が差し出すものは、見たところ些末な事なのだが読者の心の中に広がってゆき、外面的には些細だが尤も恒久的な人生の場を供給する何かからなっているのだ。」と、オースティン文学の持つ恒久的特質を指摘している¹⁶⁾。また一方、何故か劇作家シェイクスピア (William Shakespeare) になぞらえられるところもあり、サウザム (Brian Southam) は、オースティンの描く主人公の人物描写の生き生きとしたユーモアと人間性は、シェイクスピア的であると述べ¹⁷⁾、このことについてウルフは、両者の芸術に携わる精神があらゆる障害物を滅却してしまった中に、オースティンとシェイクスピアの一致点をみている¹⁸⁾。

このように、オースティンの描く小説の特徴は、(1) 構成が見事に整っていて、シェイクスピアの『空騒ぎ』(1598～99) に類似していること¹⁹⁾、(2) オースティンと同時代の十八世紀末イギリス作家の影響を受け、小説の中に劇の場面をつくり、見事な会話により作品に劇的な要素を与えていること²⁰⁾、(3) 会話の中の言葉には「深み」があり、そこに「則天去私」的手法が見える、というものである。

漱石は、文学の原理と技法を解明するために書いた『文学論』の中で、オースティンは「写実の泰斗なり」と絶賛して第一章ベネット夫妻の会話の部分を原文のまま引用している。さらに「オースティンを賞翫する能はざるものは遂に写実の妙味を解し能はざるものなり。」と、オースティンを高く評価している。引用部分を次に示して考察する。

“My dear Mr.Bennet,” said his lady to him one day, “have you heard that Netherfield Park is let at last?” Mr. Bennet replied that he had not. “But it is,” returned she; “for Mrs. Long has just been here, and she told me all about it.” . . . “Mr. Bennet, how can you abuse your own children in such a way? You take delight in vexing me. You have no compassion on my poor nerves.” “You mistake me, my dear. I have a high respect for your nerves. They are my old friends. I have heard you mention them with consideration these twenty years at least.” “Ah! you do not know what I suffer.” “But I hope you will get over it, and live to see many young men of four thousand a year come into the neighbourhood.” “It will be no use to us, if twenty such should come since you will not visit them.” (pp.3-5)

ロングボーン村の名家であり、結婚後二十三年が経ったベネット夫妻には五人の娘達がいる。夫婦の間で近隣のネザフィールド・パークを借りて、年収4、5千ポンドの若い独身青年が引越してくること、年頃の娘達の結婚を考え早々に訪問し挨拶に行く必要があることが話題になる。五人の娘達がよい結婚をすることを生涯の大事と考えているベネット夫人は“*She was woman of mean understanding*”であり、エゴの強い、お天気屋の批評家で俗事に強烈な関心を持つ。一方、ベネット氏は、理知的で皮肉なユーモアが得意であり、物事をさめた目で見える。挨拶訪問をせがむ夫人に「そろいもそろって大した取得のない娘ばかりだ」と皮肉をいって夫人を揶揄し、むしろじらせて面白がっている。この一節には、夫婦それぞれの性格、価値観、社会的背景が会話文で描写される方法であって、ヴィクトリア朝の地主階級の関心が、金、財産、結婚にあったことが理解できる。

漱石は、この引用部分を「取材既に淡々たり。表現亦洒々として寸毫の粉飾を用ゐず。是真個に吾人の起臥し衣食する尋常の天地なり。此尋常他奇なきの天地を眼前に放出して客観裏に其機微の光景を楽しむ。もし楽しむ能はずと云はゞ是喫茶喫飯のやすきに馴れて平凡の大功德を忘れたるものゝ言なり。」²¹⁾と、オースティンの文体と表現に着眼している。さらに「Austenの描く所は単に平凡なる夫婦の無意義なる会話にあらず。興味なき活社会の断片を眼前に髣髴せしむるを以て能事を畢るものにあらず。此一節のうちに夫婦の性格の躍然として飛動せるは文字を解するものゝ否定する能はざる所なるべし。」と評し、「夫婦の全生涯を一幅のうちに縮写し得たるの点に於て尤も意味深きものなり。」と結論を述べて、非凡なことのみに作品にするのは不自然というのが漱石の考えであった。ここで漱石はベネット夫婦の性格描写を、「夫の鷹揚にして婦の小心なる。夫の無頓着にして婦の神経質なる夫の和諧の範を超えずして、しかも揶揄の戯を禁じ得ざる、婦の兒女の将来を思ふて咫尺の謀に余念なき一悉く筆端に個々の生命を託するに似たり。」と評し、この場面を「活劇を演じる」とも表現している。さらに「此一節の描写は、単に彼等性格の深さを有するものとす。」「当面の珍事は大に人を動かすが故に深からん。」と論じ、「オースティンの深さを知るものは平淡なる写真中に潜伏し得る深さ

を知るべし」と断言し、この一見平凡で日常的な題材や表現の裏に潜む微妙な深さと、会話の中に潜む劇的效果を味わえない限り、オースティン文学の偉大さは分からないと論じたものであろう。

引用部分の日常些事の尽きない興味と情報が盛りこまれた会話の中には、オースティンは、華々しいこと、恐ろしいこと、勇ましいことを描き出してはいない。漱石は一連の家庭小説を描いた作家であって「動心驚魄」の筆をとった作家ではなく、「悉く筆端は個々の生命を託するに似たり」とする文学の方法であった。漱石の評するオースティンの「深さ」とは、平易な文章の中に潜む細かい人の心の動き、隠された説明できない複雑な人間の心理、人生を指摘したものと思われる。ここに至って、筆端に個々の生命を託した方法と文章に隠された深さを「則天去私」の言葉で表現したものと考えられる。しかし、漱石がリアリズム文学に到達するのは、『文学論』執筆からおおよそ十年後であった。『高慢と偏見』は則天去私の姿勢の具現化されている作品としてあげたといわれる²²⁾。そこで『高慢と偏見』の中から例文をあげ「則天去私」的視点からその表現を考察することにする。

“I did not know before,” continued Bingley immediately, “that you were a studier of character. It must be an amusing study.” “Yes; but intricate characters are the most amusing. They have at least that advantage.” “The country,” said Darcy, “can in general supply but few subjects for such a study. In a country neighbourhood you move in a very confined and unvarying society.” “But people themselves alter so much, that there is something new to be observed in them for ever.” “Yes, indeed,” cried Mrs. Bennet, offended by his manner of mentioning a country neighbourhood. “I assure you there is quit as much of *that* going on in the country as in town.” (pp.42-43)

イギリス小説は性格描写をするために常に発展してきたといわれるが、彼女の興味がそこに住む人間の性格描写であったことを示す場面である。風邪をこじらせたジェインの看病のためネザフィールドに出かけたエリザベスと、ビングリー、ダーシーおよびベネット夫人との会話である。貴方が性格の研究家であったことは知らなかった、性格の研究は面白いでしょうねと言うビングリーに対し、エリザベスは複雑な性格の方がおもしろいと答える。田舎は限定された変化のない社会であるので、性格研究の材料は提供されないものだとのダーシーの意見に対し、エリザベスは「住んでいる人が変化しますから、何時でも何か新しいところが観察できますわ」と、限定された世界の中での人間の性格に興味を持ち、それを冷静にじっと見つめる。田舎だって町中と同じぐらい人の変化はあるというベネット夫人。狭い田舎の日常生活が話題にされている中に、4人のそれぞれの正確が読みとれる。さらに、エリザベスとダーシーの会話には何らかの働きかけが行われ、二人の関係について重要な暗示を与えている。また一方、

ベネット夫人のはげしい性格が放出され、人間の心理の「其機微の光景を楽しむ」ことができる。ここにジェイン・オースティンの製作上の鍵が見出せるといえる。

“Certainly,” replied Elizabeth— “there are such people, but I hope I am not one of *them*. I hope I never ridicule what is wise or good. Follies and nonsense, whims and inconsistencies do divert me, I own, and I laugh at them whenever I can.—But these, I suppose, are precisely what you are without.” “Perhaps that is not possible for any one. But it has been the study of my life to avoid those weaknesses which often expose a strong understanding to ridicule.” “Such as vanity and pride.” “Yes, vanity is a weakness indeed. But pride—where there is a real superiority of mind, pride will be always under good regulation.” Elizabeth turned away to hide a smile. (p.57)

ネザフィールドでの晚餐がすみ、風邪が少しよくなったジェインとエリザベスは応接間に席を移し、それぞれ一夜を過ごしている。その時のことである。エリザベスとダーシーが「笑い」を話題にしている。エリザベスの笑いの特徴は、馬鹿げたこと、滑稽なことは何でも面白がって笑うものであって、人間の愚考、くだらなさ、きまぐれ、矛盾する笑いに興味を感じるのである。エリザベスの笑いがここにあるのが特徴である。大島一彦氏は「エリザベスの笑いは、人間と人間の欺瞞的な関係がそのまゝ、諷刺的な笑いのうちに捉えられているのである」と述べている²³⁾。エリザベスが人間の笑いをよく知った表現として、高慢はおさえているとのダーシーの考えに、微笑をかくすためそっぽを向くエリザベスである。現実をみる人間の目は単純でないという面白さ、そこにオースティンの批評精神、独特のアイロニーが生まれる。この中に漱石は大胆にして繊細なユーモアにリアリズムの独創性を感じとったのであろう。

“I remember hearing you once say, Mr. Darcy, that you hardly ever forgave, that your resentment once created was unappeasable. You are very cautious, I suppose, as to its *being created.*” “I am,” said he, with a firm voice. “And never allow yourself to be blinded by prejudice?” “I hope not.” “It is particularly incumbent on those who never change their opinion, to be secure of judging properly at first.” . . . “I can readily believe,” answered he gravely, “that report may vary greatly with respect to me; and I could wish, Miss Bennet, that you were not to sketch my character at the present moment, as there is reason to fear that the performance would reflect no credit on either.” (pp.93-94)

エリザベスはダーシーとはじめてメリトンの舞踏会であったとき、決して人を許さないと云ったダーシーの高慢さと冷たさに腹を立て、ダーシーの性格をスケッチしようとしていること

を、ダンスを申し込んできた彼に云い返す。外見は穏やかだが、内に情熱を秘めた勝気で理知的な女性であるエリザベスが、ダーシーの高慢さからくる性格を責める場面である。エリザベスがダーシーに抱いた偏見、ダーシーの持つ高慢がどのように変わっていくかという心理的なプロセスが、会話の言葉の裏に暗示されている。漱石が評する「可能的変体を封蔵する点において深さを有している」²⁴⁾ ことに、対応する部分であるといえる。

Believe me, my dear Miss Elizabeth, that your modesty, so far from doing you any disservice, rather adds to your other perfections. You would have been less amiable in my eyes had there *not* been this little unwillingness; but allow me to assure you that I have your respected mother's permission for this address. You can hardly doubt the purport of my discourse, however your natural delicacy may lead you to dissemble; my attentions have been too marked to be mistaken. Almost as soon as I entered the house I singled you out as the companion of my future life. (p.105)

コリンズ氏はベネット氏の亡き後、ロングボーンの土地財産が譲られることになっている牧師で、実に人間ばなれした、可笑しな人である。彼は土地財産だけを受け継ぐのは悪いので、妻もベネット家の娘たちから選ぼうと云う、まじめな計画を持っている。この場面はエリザベスを最初から将来の伴侶として選ぶという尊大な態度のものである。このコリンズ氏の言動は、漱石の論ずる「非平凡な行為は、平凡なる我々の動作の連続である」ことを連想させるものである。また、喜劇的な人間コリンズ氏の会話から、ヴィクトリア朝の地主階級の社会的背景を、写実の中に彷彿させていることが窺がえると同時に、作者のアイロニーを反映している。

There are few people whom I really love, and still fewer of whom I think well. The more I see of the world, the more am I dissatisfied with it; and every day confirms my belief of the inconsistency of all human characters, and of the little dependence that can be placed on the appearance of either merit or sense. I have met with two instances lately; one I will not mention; the other is Charlotte's marriage. It is unaccountable! in every view it is unaccountable! (p.135)

ビングリーに対する愛に悩むジェインとエリザベスの間でエリザベスが語っているものである。エリザベスが立派だと思える人は少なく、人間の性格なんていつ変わるか分からない、矛盾だらけであり、見かけは人格者で良識があるように見えても、人間なんて余り信頼はおけないと、エリザベスの人間を見る確かさが語られる。このようにすべての人間の性格は矛盾だらけで、一見価値があり良識があると思われるものにも、あまり信頼はおけないというエリザベス

の人間に対する敏感な観察を、オースティンはアイロニカルに表現し、彼女の最大の関心事が人間そのものであることであった。この会話は平凡であるが、その深層には普遍的な人間性の真実を見ているオースティンの鋭い洞察力が潜み、漱石をして「平坦なる写真中に潜伏し得る深さを知るべし」といわしめたものであろう。

Her coming there was the most unfortunate, the most ill-judged thing in the world! How strange must it appear to him! In what a disgraceful light might it not strike so vain a man! It might seem as if she had purposely thrown herself in his way again! Oh! why did she come? or, why did he thus come a day before he was expected? . . . Never in her life had she seen his manners so little dignified, never had he spoken with such gentleness as on this unexpected meeting. What a contrast did it offer to his last address in Rosings Park, when he put his letter into her hand! She knew not what to think, nor how to account for it. (p.252)

オースティンの世界は人間であり、自然はあまり描いていない。ガーディナー夫妻との旅の途中で立ち寄ったダーシーのペンバリー邸の光景は、エリザベスのダーシーに対する一切の疑惑や偏見の思いを吹き払い、むしろ自分がこの屋敷の女主人になれたかもしれないことを思い起こさせる。この館の自然美は所有者ダーシーの趣味のよさを偲ばせ、この場面においてエリザベスはダーシーに会いたい、しかし彼の愛を拒絶したために会いたくないと云う複雑な気持ちに揺れ動く。自然は人間の心を変化させ、エリザベスの心にも変化が起こり、ダーシーに対する認識を改めさせる。一方、強い誇りを持っていた名門出のダーシーは、この誇りが相手の心を傷つけジェントルマンらしからぬ態度の振舞いであったことを、エリザベスの非難で反省している。その自然の中で出会ったダーシーはすっかり変わり本当のジェントルマンになった。ここでは、エリザベスの彼への好意の変化ばかりでなく、ダーシーの姿勢の変化も明らかである。心理作家であるオースティンは、人間の複雑な、矛盾する心理描写を男女の愛と優しさの中にリアルに描いている。漱石は十九世紀イギリス文学において養成された心理描写を用いて、後期作品を作りあげていったといえる。漱石はオースティンの描く微妙な心理に着眼していたに違いない。

If there is no other objection to my marrying your nephew, I shall certainly not be kept from it, by knowing that his mother and aunt wished him to marry Miss De Bourgh. You both did as much as you could, in planning the marriage. Its completion depended on others. If Mr. Darcy is neither by honour nor inclination confined to his cousin, why is not he to make another choice? And if I am that choice, why may not I accept him? “Because honour,

decorum, prudence, nay, interest, forbid it. . . (p.355)

ダーシーの伯母キャサリン夫人はエリザベスとダーシーが婚約したという噂を聞いて、娘の婿にと予定していたダーシーを、エリザベスに取られた腹いせからロングボーンにやって来る。キャサリン夫人の娘、ド・バーグ嬢とダーシーの黙約を何とも思わないのかと、さんざん皮肉を浴びせる。エリザベスは、ダーシーが私を選んだのだから、私が受けるのがどうしていけないのかと反発し、彼女の中産階級の誇りを遺憾なく云い表す。ここにはエリザベスの才気溢れる自己認識がみられ、規範による判断が如何に浅薄で、非人間的であることを暴露したものである。風刺と皮肉と機知を遺憾なくリアルに発揮している。

以上の例文から窺がわれるように、エリザベスとダーシーの恋愛は、理詰めの話から成立する。場面ごとに交わす会話は、個々のエゴイズムを修正し、二人の恋愛の段階的な進展をリアルなタッチで見せてくれる。メロドラマではない。主人公エリザベスは自己を主張し、自分の意思で行動し、恋愛でも妥協せず、世間体も余り気にかけない女性である。

オースティンの家庭小説が扱う題材は「非凡異常」²⁵⁾な事件ではなく、日常的な人間の営みに潜む、より非日常的なものを暗示する必要があった。その点において、漱石がオースティンの「平坦なる写実中に潜伏しうる深さ」を見出し、オースティンの小説技法を理想として、漱石はオースティンのリアリズムの中の「深さ」を「則天去私」と結びつけたと考える。

IV. 結 論

十九世紀イギリス文学の中で、家庭小説を描いた写実主義作家ジェイン・オースティンを、漱石は高く評価した。漱石自身も夫婦を中心に一連の家庭小説を描いた作家である。オースティン文学の特徴は、会話と叙述である。会話はその内容や話し方に多くの情報が盛りこまれ、会話に潜む登場人物の性格、個性、意識を定義づけている点で劇的である。これらの情報が織り込まれた会話の中には作者の判断や知識が示され、「私」が出てこない。漱石は、英文学を道場として新しい創造の文学を晩年まで模索していった作家であった。「則天去私」は、自然主義思潮に反発するかのように、晩年に至って漱石が行きついたオースティン文学を模範とする創作法であった。すなわち、オースティンの描く平易な文章の中に潜む、洞察力がないと見落とされてしまう「本心」、その「深さ」に共鳴したものと考える。『高慢と偏見』は、高慢と偏見を持つ男女がそのことに気づき、反省し、愛が育っていく細かい心理描写が描かれ、結婚に至るというものである。Ⅲ章に示した例文に見られるように、内容は「日常のエピック」であり、漱石の評する「動心驚魄」の内容ではない。例文の一つ一つには、その文章の裏に潜む人生の根本問題とその結びつき、その根底に横たわるリアリズムと道徳感覚、その中に「則天去私」の深さが見えることを示した。主人公エリザベスの機智に富んだ知性、自我に目覚めた行動は、

漱石にとって、西欧文学の近代化の形成に重要な因子である自我の問題に気づかされたのである。漱石は『高慢と偏見』の中に「平凡の大功德」を発見し、そこに「則天去私」を結びつけたのであろう。

〔注〕

- (1) 松岡譲『漱石先生』(岩波書店 1986) p.154.
- (2) 夏目漱石『漱石全集、第九卷「文学論」』(岩波書店 1966) p.365.
- (3) 高際澄雄：夏目漱石『文学評論』第三編における引用の問題性とその機嫌、宇都宮大学教養部研究報告、第28号、1994、p.61.
- (4) 夏目金之助『漱石全集 第十五卷「文学評論」』(岩波書店 1995)
- (5) 森田草平『近代作家研究叢書116 夏目漱石』(日本図書センター 1992)
- (6) 江藤淳『近代作家研究叢書128 夏目漱石』(日本図書センター 1993)
- (7) 佐々木充『漱石推考』(桜楓社 1992)
- (8) 亀井俊介・出淵博、『漱石全集第十四巻、文学論、注解』(岩波書店 1995)
- (9) 海老池俊治『漱石全集 月報 7 (漱石と英文学)』(岩波書店 1966)
- (10) 廣野由美子『十九世紀イギリス小説の技法』(英宝社 1996) p.17.
- (11) 廣野由美子『十九世紀イギリス小説の技法』(英宝社 1996) p.18.
- (12) Narjorie Boulton, *The Anatomy of the Novel* (London: Routledge & Kegan Paul 1975) p.119.
- (13) Jane Austen, *Pride and Prejudice* (London, Printed for Egerton 1813)
- (14) Julia Prewitt Brown, *Authorial Voice and the Total Perspective: Jane Austen's Pride and prejudice Modern critical interpretations*, ed. Harold Bloom (New York Chelsea House 1987)
- (15) Jane Austen, *Jane Austen's Letters to her sister Cassandra and others*, ed. R.W.Chapman (Oxford Univ. Press 1979)
- (16) “Jane Austen” *The Common Reader, First Series* (1925) 収録
- (17) 蛭川久康著訳『講座・イギリス文学作品論 第3巻「ジェイン・オースティン」』(英潮社出版 1977)
- (18) Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (London, Hogarth, 1929) p.101.
- (19) 近藤いね子、『英国小説と女流作家』(研究社 1955) p.26.
- (20) 廣野由美子『十九世紀イギリス小説の技法』(英宝社 1996) p.48.
- (21) 夏目漱石『漱石全集、第九卷「文学論」』(岩波書店 1966) p.365.
- (22) 松浦嘉一『夏目漱石研究資料集成 第五巻「漱石先生とメレデスとオースティン」』(日本図書センター 1991) p.9.
- (23) 大島一彦『ジェイン・オースティン』(中公新書 1997)
- (24) 夏目漱石『漱石全集、第九卷「文学論」』(岩波書店 1966) p.371.
- (25) 夏目漱石『漱石全集、第九卷「文学論」』(岩波書店 1966) p.369.

〔参考文献〕

- クレア・トマリン、矢倉尚子訳 『ジェイン・オースティン伝』（白水社 1999）
川崎寿彦 『イギリス文学史』（成美堂 2000）
海老池俊治 『明治文学と英文学』（明治書院 1968）
夏目金之助 『漱石全集 第二十一巻』（岩波書店 1997）
夏目金之助 『漱石全集 第二十七巻』（岩波書店 1997）
相原和邦、『漱石文学』（塙書房 1980）

（かまた きょうこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程）

（指導教授：川野 美智子教授）

2002年10月16日受理